

COTO TSLUSHIN

発行 / 滋賀医科大学同窓会湖医会
〒520-2192 大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
TEL 077-548-2074, FAX 077-548-2094
E-mail:koikai@koikai.org

湖都通信42号

Since 1987, Editor Takehiro Inui,
Co-editor Takashi Kadowaki,
Tetsunobu Yamane
印刷 / 昌栄印刷 2003.6.30

第2回『湖医会賞』受賞者決まる！

青木裕彦氏と茶野徳宏氏に



青木裕彦氏



茶野徳宏氏

5月17日第2回『湖医会賞』選考委員会が開かれました。今回、3名の推薦応募がありましたが、今回より選考委員会に先立って、推薦人よりそれぞれの推薦理由を述べていただくことになり、よりスムーズな選考を行うことができました。

受賞者は、臨床・福祉領域から介護老人保健施設ケアセンター 志賀院長の青木裕彦氏（1期生）。これは福祉領域に早くから着目し、老人医療に取り組んできた実績が評価されたものです。また研究領域では前号の湖都通信でその研究を紹介しましたが、恵まれない環境にありながら成果を上げた茶野徳宏氏（10期生）に決定しました。

2人の受賞者の方々は、昨年同様10月開催予定の『湖医会』総会での授賞式の席で賞状と副賞20万円が授与されます。また若鮎祭で受賞講演をしていただく予定です。学生たちにとって力強い励ましになることでしょう。

尚、第1回受賞者の井上慶郎氏（8期生）には、5月本学にて医学概論の講義をしていただきました。またもう一人の受賞者の埴田和史氏（3期生）とともに二人からこの秋スタート予定の『湖医会奨学金』（仮）へのご寄付をいただくことになっています。

すでに第3回『湖医会賞』の募集もスタートしております。自薦・他薦を問いません。皆様からの応募お待ちしております。

詳しくはホームページを「ご覧ください」。http://www.koikai.org

（2頁に関連記事）

『湖医会賞』とは、
「湖医会」創立20周年を記念して制定されたもので、研究や学生等の教育、地域医療等の臨床・福祉、その他の領域で優れた実践を行い医学および医療・福祉の向上に貢献した本会員に対して贈られるものです。

『滋賀医大生協』

順調に営業中！

4月に食堂・売店業務がスタートし、真新しい会員証も手元に届きました。「生協を作ろう」という声があがってから、全国大学生協の中で最も短期間で設立されました。

現在組合員も800名になり、書籍部のオープンに続き、自動車教習所やレンタカーとの提携や生協マンションの斡旋と業務を拡張しつつあります。食堂は以前と比べ、メニューも抱負になり味付けも家庭的で大変おいしいと好評です。なかでも一番人気は「リクエストメニュー」。これは希望のメニューをリクエストして採用されれば、本人は初回のみそのメニューを無料で食べられるというものです。ちなみに一番最初のリクエストは吉川学長で、最近では2千円の豪華近江牛ステーキ定食が登場したそうです。

現在は教職員の利用もぐんと増えて、附属病院で勤務する人の利用も多いようです。「自分たちの学生時代に生協があればよかった」という卒業生の声も聞かれました。今後、全国Q湖医会・会員が利用できるように生協関係者との話し合いがもたれることになっています。

（関連記事10頁）

食堂の一角に設けられた書籍部



人気のリクエストメニュー



大好評の食堂。賑やかな昼食時。

主な記事

『湖医会賞』選考理由・・・2
私の研究・・・3
われら卒業生！
抱負を語る・・・4～5
三つの同期会・・・6～7

滋賀医大はどこへいくのか・・・8
『保健師会』やってます・・・9
シンポジウム / 体験談・・・10
議事録 / ナース三姉妹・・・11
LITTLE WINDOW・・・12

第2回湖医会賞選考委員会の報告

選考に当たって 及び選考理由

第2回湖医会賞は2領域から3名の候補者が推薦されました。今回からは推薦者が選考委員会におもむき、推薦理由などを直接説明する形式をとりました。

推薦者の退席後、いよいよ選考に入りました。活発な議論がなされたのち、結果として2名の授賞者を決定しました。

なお、規定により選考委員会は幹事の互選による委員若干名及び特別会員若干名をもって構成され、委員長は選考委員の互選で決定しました。(委員長)

野崎光洋

今年度は、推薦された3名の候補者について推薦者から直接推薦理由を聞いた後、選考に入りました。その結果、研究と福祉の分野から夫々1名を受賞候補者として選びました。二人はいずれも学生時代、勉学のみならずクラブ活動などを通じて楽しい充実した学生生活を送られたことで、それが卒業後の肥しとなったのではないかと考えられます。本賞は地味な分野の業績にという前回の選考方針がありました。今回提出された研究分野の候補者は、あまり恵まれない研究環境の中で卓越した研究であり、委員全員の高い評価を受けました。また、選にもれた一人も決して業績が劣るというところではないのですが、評価の対象となる客観的な資料が足りなかったのが残念でした。いずれにしても二人の今回の

受賞が、受賞者のみならず他の会員に対しても励みになることを期待しています。

前田敏博

まず、候補者3人の業績を調べることに。研究領域で推薦された茶野氏の業績については評価が高く、満場一致で選出された。他の2人については、同じ臨床・福祉領域からの推薦で、二人とも選んではいと言ったが、同領域からの選出は1名にしようということになり、青木氏の受賞が決定した。青木氏をよく知っているという人から話しも聞いたが、人物的にも「文句無し」ということだった。選考された一人の学生時代を知っているが、正直あまり大したことはなかった。受賞は卒業してからの忍耐や努力の賜といえる。このことは学生諸君にとって大きな励みになるだろう。残念ながら今回受賞できなかった人もその活動は皆が認めるところだったが、受賞するに値する、特別な理由になり得なかったということである。今後に期待したい。

渡辺一良

臨床・福祉領域候補の青木氏は異色の学生(雀荘の主)として皆に知られていた。卒業後は第1外科に入院、阪大特殊救急部などで修練を積んだ。しかし早い時期から福祉分野に着目して、湖西地域で老人保健施設を開設したのを皮切りに、その後も痴呆性老人のグループホームを県下で初めて開設した。その



選考委員は次の通り(敬称略)
委員長: 渡辺一良(会長)
委員: 前田敏博・野崎光洋(以上特別会員)
; 中島滋美・竹下和良(以上湖医会 会員)

先見性、行動力は見事であり、施設内のスタッフから厚い信頼を得ているなど、受賞に相応しいと考えられた。

もう一人同じ領域から推薦された方は小児科医院を開業されているが、小児に限らずお年寄りまで一やかかるといって厚い信頼をおつめ、毎日多数の患者さんを診る一方で、保団連理事や保険医協会の理事等として、中央官庁などとの折衝に多忙な日々を送るなか、学生時代にはまったく縁のなかったフルマラソンに出場するなど、マルチタレントな生き方が高く評価された。同領域から1名を選ぶということになり、このお二人をどう扱うか議論となったが、近未来の福祉・医療の方向性、学生実習なども視野に入れた大卒との連携などを考慮して、僅差ながら、青木氏に受賞していただくこととなった次第である。

研究領域候補の茶野氏。研究業績は偉大で、糖尿病におけるインシュリンの発見に匹敵する、と評価する英国人教授もいるというが、こはあえて研究業績以外に注目してみたい。彼はじつと座って講義を黙って聴くことが大嫌いなハンドボール部の学生であった。そんな彼がある日、基礎教科の実習中に、実験、研究することの醍醐味を知ってしまった。その時の飛び跳ねるような楽しさが忘れられず、彼のどこかにとどまっていた

に違いない! 整形外科に入学し大学院を終了した後、さらに研究生活を選んだと言っただから、ところがなかなか思っような結果は出ず、随分「しんどい」時期が続き、苦しんだ。そこへ学内の教官、他科の先輩などの協力があがり、さらにはクラブの後輩である学生も力を貸してくれて、ついに大発見に結びついたというのである。なんて素晴らしい話だろうか。

学生時代の(雀荘やクラブ活動など)一見無駄と思えるような時間も、その人生で大きな力を発揮する口火としてとても大切である、という思いを会員の皆様と共感したいと思う。

中島滋美

診療・福祉領域の青木氏に関しては、外科医から突然畑違いの老人福祉医療に進まれて、見事にシステムを構築し、湖西地域の福祉を牽引してこられたことが評価された。学生時代や若いころの青木氏を知っている人から見れば意外かもしれないが、事業の先見性や行動力、スタッフに対する指導力、地方自治体との連携が評価された。今後さらに滋賀医大とも連携を深めてすばらしい福祉システムを構築していただきたい。もうひとり青木氏と同領域から候補に挙がったかたは、患者からの信頼が厚く、外来患者も多数診ておられ、開業医としては普通以上の仕事をされており、しかも、医師会・保険医協会・全国保団連の理事をされ、医療の改革に関する提言活動が評価された。地道な臨床活動が評価されることも必要であるとの意見もあったが、臨床医であれば臨床を一生懸命やるのは当たり前だという意見もあり、また、提言活動が個人の活動ではないという意見もあり、今回は受賞者には選ばれなかった。

研究領域では茶野氏が同時に2人の会員から推薦されたが、彼の地道な研究努力とその成果が評価された。恵まれた環境で行われた研究に対してはよい成果が得られるのは当然だとい

考えて、単に業績がよいからというだけでは湖医会賞はもらえない。今回の茶野氏の業績は、彼の地道な努力と執念、そしてある程度恵まれた環境と運がよかったために得られたものであると評価された。また、たまたま周囲の研究者が彼の業績をサポートしたこと大きな要因である。研究ポストに就いている者が研究をするのは当然だという意見もあったが、1から個人的な努力で築き上げてきたすばらしい業績に対して、彼をサポートした周囲の人たちへの評価を含めて授賞することに決定された。

竹下和良

茶野徳宏氏は、大学院卒業後も研究に対する興味を持ち続け強い意志で自らの研究を地道に遂行した。そこには決して恵まれた研究環境はなかった。しかし彼は自ら築き上げた学内の研究者とのコラボレーションにより見事に研究を進展させた。またそこには若い研究者の熱意を支える理解ある当該科の教授の存在も大きかった。彼の研究成果は若い滋賀医大卒業生たちへ大きな勇気を与え、また滋賀医大の発展のために不可欠な若い研究者の育成という大学の役割において一つの大きな成功事例となった。

青木裕彦氏は、外科医の経験の中で高齢者や治せない病気に苦しむ患者に接するうちに福祉介護の重要性に気付いた。介護保険制度の実施に先駆けて介護福祉事業を大津市や志賀町においていち早く展開した。患者や職員からの信頼はもちろんのこと行政からの信頼も厚く、臨床福祉分野で最も活躍されている滋賀医大卒業生の一人といえる。

次号に受賞者の感想を掲載いたします。

ニッチを 探して

色素幹細胞の発見とその維持機構の解明



ハーバード大学医学部ダナファーバー研究所
西村栄美 (医・14期生、旧姓・川端)

自然はなんと巧妙で美しいだろう。そんな畏敬をも感じさせる自然の魅力にとりつかれたのは、白斑マウスとの出会いに始まる。卒後京大皮膚科に入局し、色素性疾患を経験し、その目でいろいろな白斑パターンをとるマウスを見てみると実に興味深いものであった。この多様なパターンはどのようにして生じるのかを追究していくうちに、未知の細胞集団に出会うことができ、“何か面白いことをこの目で見つけてみたい”という学生時代からの漠然とした願いがひとつとなった。

色素細胞(メラノサイト)は、神経堤由来し、一斉に真皮を遊走し表皮や毛包などに分布するというユニークな発生をした後、メラニン顆粒をつくり我々の皮膚や毛に固有の色を与えている。その遊走局在機構を分子遺伝学教室(西川伸一教授)において研究して学位をとったが、実はまだ未知の細胞集団があって、自分はこれを無視しているのではないかという懸念があった。ヒトの尋常性白斑の治療過程においては、皮膚の色素沈着がしばしば毛の周りから始まることが知られている。外来で経験した症例もそれは見事なものであった。面白いことに、c-Kitの阻害抗体を生直後のマウスに投与すると完全に皮膚の白いマウスとなるが、新しい毛周期に入ると、どこからかメラノサイトが現れ黒い毛が生えてくる。毛包に幹細胞が存在するのでは?という期待を持ちつつ、この細胞を目で見える形にするのにあらゆる手をつくした。自然はつ

いに白黒ははっきりと応えてくれた。

その未知の細胞集団は毛包の中ほどにわずかに突出しているバルジと呼ばれる領域周辺に局在していた。これまでに、成体組織の幹細胞は、ニッチ(niche)と呼ばれる特別な微小環境(生態的適所)のなかで維持されているであろうとされてきたが、その“場”としての意義も明らかではなかった。今回、色素幹細胞の系で、実際にニッチが幹細胞の子孫細胞の運命を優勢に決めていることを実験的に示すことができた。

本当の正念場はこれ以降であった。“幹細胞”というには、生体内での将来の再生能を示す必要があり、完全な証明は一筋縄ではいかない。Natureに投稿し運良くリバイスにひっかかったものの、留学時期に突入。留学生活を楽しむ余裕もなく、リバイスのためにさらに1年半も浪人生活のような日々をおくった。留学先で解雇されないよう努めつつも、何とかreviewerを説得するために知恵をしぼって手を尽くすしかなかった。隣にすわっていたハーバード大学のMD, PhDコースの学生に英語を助けてもらった。本来留学をもっと楽しみたい夫も応援してくれた。Reviewerからの返事が異様に遅く、editorial officeに何度も電話やメールで催促した。そしてあまりに長く続くストレスに疲労していたときに訪れた感動的なacceptの知らせとNatureのカバー。やっと世の中に送り出せた!という達成

感、内容が認めてもらえたことへの喜び、周りからの暖かいサポートへの感謝でいっぱいだった。滋賀医大在学時に学んだことや学生時代に頂いたサポートなくしては今回のことはあり得なかったと思う。学生時代はアトピー性皮膚炎を初めとするアレルギーの基礎研究に興味があったが、進路に困りはてていたときに、基礎医学や皮膚科の諸先生方が相談に応じて下さった。ESS関連の大会の準備でもお世話になった。お忙しい中、よく私みたいな学生を相手に親身にアドバイスくださったとつくづく有り難く思う。この場を借りまして、お世話になった諸先生方に心からお礼を申し上げます。本当に有難うございました。

今、再び自然に問いかけることができるようになり、あらたな角度から再生医療にむけてアプローチしている。幸運にも色素幹細胞システムは、再生研究に格好の系となりそう。イモリやヤモリのような完全に健全な再生をヒトでも実現できることを夢見て、自分の知りうる何かが少しでも役立つ“場”があればと思う。そんな自分の“ニッチ”を探して旅している。

西村栄美さんは今年度、第52回『皆見省吾記念賞』を受賞されました。この賞は本邦における皮膚科学に関連する業績のうち最優秀のものに日本皮膚科学会から贈られる賞であり、滋賀医大卒業生では初めてのことで

われら卒業生！

抱負を語る

病院長に就任して

琵琶湖病院 院長

石田展弥(医、2期生)



琵琶湖病院は天津市坂本にある324床の単科精神病院である。理事長の加藤明先生が50年前にはじめた精神科診療所を始まりとし、地域精神医療に貢献することを理念に掲げて診療が行われてきた。私どもの理念を引き継ぎ患者さん中心で地域の精神医療に役立つ病院運営をしたいと考えている。

精神科医療は地域との連携が必要である。「病気が治っても、退院して生活ができなければ、「治った」ことにはならない。このためには、さまざまな手立てが必要であるが、突き詰めれば、精神科医療が地域の人たちからの信頼をえることが基盤になくてはならない。陳腐な表現であるが精神障害への理解と地域との連携強化である。

このための目標は、まず、非精神科同様に入院期間を短縮化し、外来治療で地域・在宅の患者さんを支えるシステムを作ることである。長期の入院は、患者さんが地域で生活する基盤を奪い社会復帰を困難にし、患者さんの精神科医療嫌いを作り、再発時の対応を遅らせるものになっている。早期退院による地域の人たちの不安は、訪問看護、ケースワーキングの徹底により、症状再燃時に早急に対処するシステムの構築により解消され、理解を得ることにつながる。また精神病院がその使命と責任感を種々の局面でアピールすることも必要である。たとえば、精神科救急対応システムのなかでもそれらは発揮され、やがて地域の人たちの理解をえられることになる。考えられる。なかなかの難題であるが、滋賀県下で諸先生が運営されている精神病院を範としてゆつくりと目標にむかって進んで行きたいと考えている。

これらの目標をまず達成することが私に課せられた臨床的課題と認識しているが、後輩の先生方のためにも多少の役に立ちたいと考え、平成16年度から始まる新研修システムの協力病院として滋賀医大、公立高島病院からの研修医を受け入れることにしている。

今後とも諸先生方にはご指導ご鞭撻、ご協力をよろしくお願いしたいと存じます。

湖医会のみなさま、こんにちは。わたしは、8期生で卒業後滋賀医大眼科学教室に入学し、10年間の滋賀県立小児保健医療センター眼科での勤務を経て今年4月から川崎医療福祉大学感覚矯正学部の教授に就任しました。小児眼科・弱視斜視を担当します。

研修医時代から伝統ある滋賀医大の斜視外来で勉強することができ、小児センターでは様々な症例を経験することができたばかりが長期的な経過を追うことができませんでした。患者さんが私の先生であつたといえます。また、滋賀医大眼科の可児教授はじめ先輩方が大変優しくご指導くださったこと、暖かく見守ってくださったこと、優秀な後輩と一緒に楽しく診療できたこと、他大学の小児眼科・弱視斜視・眼形成のエキスパートの先生方が(ロンドンへの留学の仲介など)多方面から力強く支えてくださったこと、など数え切れない幸運が重なりました。

今回、川崎から感覚矯正学部の教授選に出て欲しいと滋賀医大に依頼があつたと可児教授から連

小児眼科のために

川崎医療福祉大学感覚矯正学部 教授

瀧畑能子(医、8期生)



絡をいただいた時は耳を疑いました。21年間住み慣れた滋賀を離れるのは辛かつたのですがこれから湖医会のメンバーとして恥ずかしくないように頑張ります。

滋賀医大眼科は日本の小児眼科・弱視斜視のトップのひとつです。川崎では、滋賀で学んだことをさらに発展させていきたいと思えます。滋賀医大には優秀なメンバーが同じ分野を発展させていくことは疑う余地がありませんので、これからは私の手こわいライバルなわけです。切磋琢磨しまた、協力しあつてお互いを高めていければと願っています。そして何より、できの悪い私を忍耐強くご指導くださいました可児教授への尊敬と感謝は生涯忘れられるものではありません。

最後になりましたが、湖医会のみなさまの発展を倉敷からお祈りいたします。

滋賀にできた
のびわこ成蹊ス
ポーツ大学の教
授として平成15年
4月1日に着任し
ました。日本初のス
ポーツ大学ですが、文部科学省
の評価も高く、入試には多くの
受験生を集めた注目される大学
です。6〜25倍の激戦を勝ち抜
いた1期生237名を迎えて入
学式、オリエンテーションが終
了し、講義が進行中です。教授
陣には元オリンピック選手、世
界チャンピオンのサポーターチ
ーム、医師、障害者スポーツのサ
ポーター、野外の専門家など医
学部とは大違いです。大学には
いろんな施設が揃っており、健
常者はもちろん循環器疾患や生
活習慣病の運動療法を指導・実
践する事が夢です。場所柄、登
山・キャンプ・スキーなどの野
外スポーツが目玉で、問題行動
児の行動療法として実績があり
ます。サッカー部に50人以上の
学生が集まりました。日本代表
の小野、高原、稲本の育ての親
である松田保監督の人柄・チー
ム作りの実績が魅力ですが、客
員教授の井原正巳(元日本代表主
将)さんらサッカーの有名選手や
指導者が全国から週替わりにな
り指導に来ています。僕が学
生の時にサッカーの指導を頂い
た豊田先生がサッカーの指導者
を育成するための理想的な大学



高橋正行(医、1期生)

2つのオンリーワン

びわこ成蹊スポーツ大学 教授

を作ろうという？お誘いで転職を決意しました。滋賀医大のサッカー部出身の循環器スポーツドクターという事で、サッカーの心拍トレーニングを取り入れる予定です。日本一の人工芝の練習グラウンドと天然芝のサッカー場に恵まれた環境で伸び伸びと練習と試合を行っています。循環器の機器としてトレッドミルや自転車エルゴメーターの負荷と心電図・呼吸ガス分析装置、携帯型血圧測定装置、簡易型連続心拍測定装置、乳酸測定装置など設置しました。トレーニングマシンやジム、エアロビやダンスの先生もおられますので、本格的にスポーツに取り組みたい人やスポーツドクターは一度遊びに来て下さい。森学長はナンパワゴンよりオンリーワンを目指す大学にするという方針ですが、すでに2つのオンリーワンがあります。日本でスポーツ大学は唯一である事とキャンパス内禁煙を実現した唯一の大学です。健康スポーツの指導者育成も重要ですので、需要のある日本全国の湖医会の皆様にご支援・ご指導をお願いします。

E-mail: takahashi@bss.ac.jp
Tel: 077-596-8463

スポーツ精神医学の創設

早稲田大学スポーツ科学部 教授

内田直 (医、3期生)

第3期生、軽音楽部二代目部長の内田直です。2003年4月より、早稲田大学スポーツ科学部スポーツ医科学科スポーツ精神医学講座を担当しております。1983年に滋賀医大を卒業してから、20年間経ちましたが、このように教授就任に際して湖医会から原稿の依頼をいただき、母校のありがたみを感じ、大変嬉しく思っています。私は卒業後すぐに、東京医科歯科大学神経精神医学教室に入局し、その後研修を終えた後カリフォルニア大学デイビス校精神科にて学び、1992年より東京都精神医学総合研究所にて研究を行ってきました。この度、早稲田大学に移動するにあたりよく聞かれることは、スポーツ精神医学ってなんでしょうか？です。スポーツ精神医学は非常に新しい学問であり、実質的な学問的活動としては1980年代後半に提唱され、1990年代初頭に米国で国際スポーツ精神医学会(国際)といってほぼアメリカの国内学会に近いものが作られたのが最初だと思えます。しかし、アメリカでの活動は主にはプロスポーツ選手の精神医学的サポートが主体です。今回、我々はスポーツと精神医学の関連に興味をもった人たちに声をかけ、日本スポーツ精神医学会を設立し、この9月に第1回の学術集会を東京で開催する予定です。日本におけるスポーツ精神医学会の活動では、アメリカの活動よりもさらにフィールドを広げ、(1)スポーツの精神医学への応用、(2)精神医学のスポーツへの応用、(3)身体運動と脳機能の基礎的な研究を三つの柱として学会活動を考えております。具体的には(1)ではうつ病寛解期の運動療法など、(2)ではトップアスリートなどの精神医学的問題の治療、そして(3)はスポーツ選手の脳機能研究などです。私はこの学会で事務局長を担当し、是非この分野の学問を大きく広げていきたいと考えています。皆さんの中にも、精神科、あるいは他の臨床科の方でもこのような分野に興味のある方は是非お声をかけてください。また、早稲田大学での私のホームページ(www.f.waseda.jp/sunao)で、今後の私の活動を逐次報告していきたいと考えておりますのであわせて宜しくお願い申し上げます。



E-mail: sunao@waseda.jp

同期会

医学科
卒業20年 2 期生

卒業生の活躍が楽しみ 名誉教授 野崎光洋



2期生の同期会にお招きを頂き有難うございました。皆さんとお会いできるのを楽しみに、学生時代の顔を思い浮かべながら会場へ向かいました。会場に着いたとたん、一見して彼だ、彼女だとわかる人、暫らく考えないと思い出せない人、いろいろでしたが、話しているうちに学生時代の顔とオーバーラップして2年前にタイムスリップするのになさほど時間はかかりませんでした。

の思い出話など尽きることがありませんでした。席上、出席者全員から想い出や近況についての話があり夫々の活躍状況を知りました。いずれの方も風貌といい、体型といい、医師あるいは社会のリーダーとしての貴格と風格がにじみでており、20年の歳月も同時に感じました。

一応、我々は第一線を退きましたが、これからの楽しみの一つが卒業生の活躍を見守ることです。10年後の再会を約束しましたが、果たせるかどうか定かではありません。しかし、それを一つの目標に我々自身健康管理に務めたいと思っています。皆さんも生活習慣病が気になる年齢になられました。『医者の不養生』等といわず、生活習慣には十分注意されるよう祈っています。2時間半ほどのパーティーでしたが、楽しいひと時でした。今後の活躍を祈りつつ、お別れしました。

大学をサポート

ふくだ内科クリニック 院長



福田正博

先日、開催された同窓会には学年担任であった恩師の先生と40名余が集まり、10年ぶりの旧友との話に花が咲きました。

参加者全員とは直接会話はできませんでしたが、各人の入学時の写真をスライド上映しながらの近況報告のコーナーがあり、大学など研究機関でリサーチや最先端の臨床で活躍している人、開業し地域医療で頑張っている人、実業家(?)になった人など、いずれも自

分の選んだフィールドで中核的存在として充実した仕事をされているようで、ずいぶんと刺激になりました。

大学に在籍している同窓生からは、大学も独立法人化が目前に迫り他大学との合併話など母校の前途にも厳しいものがあるとの話もありましたが、なんと同窓生としても湖医会育英基金の設立なども含めサポートしていきたいものです。

さて、次回開催は30周年記念ということですが、10年後には、大学・病院・診療所間が光ファイバーによる高速ネットワークで結ばれていることでしょうか、都合で当日参加できない同窓生とも、バーチャルに一堂に会することが可能になっていないかと思えます。その時はどんな趣向が飛び出すか、また諸氏の変わりような今から楽しみです。

最後にこのような楽しい会にいただいた幹事の方々、湖医会事務局の方々、また受付などを手伝っていただいた現役生にもこの場をかり感謝いたします。

では、10年後の再会を期して。

母校や同窓生は暖かく

山下医院 山下朋子



卒業20年の同窓会ともなると、みんな40代の半ばを過ぎ、活気があふれていました。「変わらないねえ」と口々に言いながらも、お互い頭には白いものが混じり、おでこが広くなり、おなか周りは成長期です。一次会では、あちこちへ席を替えながらの談笑が続き、昔の呼び名で呼びあいました。誰と隣り合っても、つい昨日まで一緒に通学していた



ように話が弾むのは驚きでした。私も何十年かぶりでもちゃん、ともちゃんと呼んでもらって、すっかり若いでしまいました。時間が経つのは早くまだまだ喋り足りなくて、あまり人数が減らないままソロソロと二次会会場へ移動。とても楽しい一夜でした。

前回の卒業10年同窓会、私は小児科の臨床にどっぷり浸かった後、自分の子育ても始まった頃でした。ここ10年は、ドイツでの専業主婦としての2年間を経て、パートの小児

自分をみつけた夜

香川県立中央病院 救命救急センター 上原早苗



うわー、やったあ！みんなに会える!!同期会の予告葉書きを、数枚の手紙の中に見つけた時、思わず玄関先で大声をあげてしまった。なぜかそれほど嬉しかったのだ。

常の中で、なぜか自分に自信が持てず、宙ぶらりんな気持ちでもやもやしている私があった。それを吹き飛ばす力が、この会にあるような気がしたのだ。ある意味、自分の存在を確かめに行くような、ある意味、今の現実を少しだけ離れたいような。

滋賀医大を卒業し、社会人になってはや5年の月日が流れていた。過ぎてしまえばあっという間だったが、本当にいるようなことがあった。看護師としても、人間としても、いろんなことを体験し、感じ、考え、学んだ。どうしようもないくらい悩んだり、へこんだり、投げ出してしまいたくなることもあった。反対に、楽しいことだって嬉しくて仕方ないことだってたくさんあった。私なりに、ここまでやってきた。ただ、あわただしい日

科医として週に何日が働いています。日によっては掃除や洗濯をしてから出かけ、子供たちより早い帰宅を心がける。充実してはいるけれど、このままでいいのかと考えてしまうこともあります。となりの京都にありながら、滋賀医大の改革について何も知らず、同窓会から消滅しそうな状態で、しかも、それもまたよいかと思っていました。でも今回、母校や同窓生は暖かく有難いものだと再認識し、会をお世話してくださった方々に感謝。そして、次の10年で、もう一度小児科医としても踏ん張ろうと考えてつつ家路につきました。

そして、同期会の夜。こんなに、たとえ5年の月日が流れていても、まるで昨日別れたばかりかのように同じ話題を共有し、語り合える仲間がいる。そう感じられることが、なんともいえない大きな安心感を私に与えてくれた。そうだ、またがんばろう。そう、なんだかんだいって、ずっとなにかの形で看護に携わること考えている私たち。場所や形は違って、私たちの根本には、滋賀医大での4年間がしっかりと息づいている。場所は離れていても、私にはこんなに仲間がいる。こんな、何より力強い、大きな御土産をもって帰ることができ

若々しいみんなに会えて

信州大学医学部医学科運動機能学講座 高橋 淳



滋賀医科大学12期生の10周年の同期会が2月15日に琵琶湖ホテルで行われました。

卒後10年は節目の年であり、医師あるいは研究者として方向性が確立してくる年と思います。実際、大学でがんばっている先生もいれば、市中病院で臨床、バリバリの先生もおり、また、開業し理事となり病院を大きくしようとしている先生、子育てと両立して診療を続けている先生とさまざまでした。千野君ヨット部と一緒に戦った友人の乾杯の音頭でさわやかに始まりました。恒例により(?)、受験票に添付されていた写真をバックにひとりひとりスピーチをしました。皆さん思っていたより若々しく、おじさん、おばさんと感じている先生はいませんでした。私は卒後故郷の信州大学整形外科に入局し、平成10年に帰局し、現在脊椎班に所属しており、臨床を中心に仕事をさせていたにしております。宣伝になってしまつたのですが、当グループの特色のある仕事(手術)としまして、胸腔鏡視下に6、7つの1cm程度の創のみで側弯症の矯正から固定までを行う低侵襲手術、

頸椎の脊髓と椎骨動脈の間の細い椎弓根にスクリューを挿入したり、重度脊柱変形の脊椎周囲の骨切りを安全に行うためにナビゲーションを使用したコンピュータ支援手術があります。側弯症の胸腔鏡視下矯正固定術は県外からも紹介されて患者さんが受診されます。もし希望される患者さんがおられましたら御紹介ください。半分宣伝になってしまいましたが10年後のこの会を楽しみにしております。

面影はすっかり残っていました



放射線医学講座 古市健治

去る2月15日、土曜日に12期生の同期会が浜大津の琵琶湖ホテルで開かれました。卒業以来10年経ってしまった訳で、我々も各方面で忙しい生活を送る年代となりましたが、それでも集まった30数名はお互い顔を合わせた瞬間に互いに微笑んだり挨拶したり、即座に卒業前の気分に戻るのには不思議なくらいでした。皆少しずつ年輪を刻んだものの、以前の面影はしっかりと残っていました。会が始まってしばらくたつと、入学の頃の写真がスクリーンに映し出されました。一人ずつ昔の写真を背にしなが、改めて自己紹介と近況報告をするという趣向です。大写真になった写真と現在の姿のあまりに大きな違

いに戸惑いつつ、或いは笑いつつ、和やかに時間が過ぎていきました。同期生同士で結婚し、家族そろってにぎやかに参加する人たちもいます。

話を聞けば、子育てで忙しい人、開業の準備をしている人、もう開業した人、研究や臨床で忙しい人、マイペースでゆったり仕事をしている人と、さまざまです。老親の介護で大変だが、最近血中尿酸値が高いといった身につまされる話もありました。われわれもそういう年代になったのだと実感しますが、この中にとくとく学生気分でいられるのも事実です。

そんな時間はあつという間に過ぎてしまいい、また現実に戻って「戦う」日々が続きます。また10年後に元気な姿で会いたいですね。また学生にもとって騒ぎましょう。



10年後も家族で参加!

小林智子 (旧姓 口出)

卒後10年の同期会が、2月15日に琵琶湖ホテルで開かれました。我が家は家族揃って参加させていただきました。約35名ほどの参加者でしたが、子供連れの方もいらつしゃって、記念写真の最前列を子供たちが占領してしまつほどでした。久しぶりに元氣そうなお変わりないみんなにお会いできて昔に戻つた気分でした。入学願書の懐かしい写真が映し出され、近況をお聞きでき、とても楽しい時間を過ごすことが出来ました。仕事の話だけではなく

た同期会だった。

元氣の素になった同期会



小川美里 (旧姓・西井)

2月22日、卒業後、5年経て同期会が開催された。私は、1月20日に始めての出産を経験し、ちょうど産後1ヶ月目、子供のことが心配だったが、夫に任せて参加した。会場に着くと、久々に会う懐かしい顔がいっぱい。5年経つても外見は学生時代と変わらないが、話してみると、社会人としてみんながぐんと成長し、いきいきとしているのを感じた。私達は看護学科1期生のため、先輩の引いたレールもないところから出発した。今、

看護師 保健師、助産師、養護教諭、大学院生等 それぞれの道を模索しながらも頑張っている同窓生達。5年目を迎えて、職場を変えたり、進路変更したりする人もいて、5年目はなにかと節目の年なのかもしれない。

また、結婚や出産、育児を経験している人も増えてきた。私自身、卒業後、助産師学校へ進学、3年間の病院勤務、結婚後は新生児訪問や育児相談などを経験した。特に、今回の妊娠、念願だった助産院での出産、夫とふたりで乗り切った産後1ヶ月の育児は助産師としていろいろと勉強になり、今後の夢もふくらんでいる。次回の同期会にもできるだけ多くの方が参加し、みんなの元氣の素になる会が開けますように!



御家族やお子さんの話も出たりして…。卒業から約10年、それぞれの道を歩いてまた再会できたことを本当に幸せに思いました。私は、卒後大津を離れましたが、主人が同期ということもあって、どこに住んでも大学の6年間は懐かしく心の中にありました。あの頃、同級生といえるはめをはずして学生時代を楽しんだことは私たちにとって本当に宝物です。あれから約10年、最近はお孫ちゃんに大学時代の話をしつてやる機会も増え、案内が届いた時から家族で参加



させていただかたと思っております。できればもっとたくさんの方々にお会いしたかったです。少し残念でした。この再会をきっかけに、また懐かしい交流が時折もてらばと思っております。10年後、20周年の同期会も家族揃って元氣に参加したいなと思いつながら、大津を後にしました。最後に、同窓会事務局の皆様、幹事の皆様、すてきな会を本当にありがとうございました。

滋賀医大はどこへいくのか?!

このコーナーは来年4月の国立大学独立行政法人化に向け変革期の最中にある滋賀医大の中にあって、「変革」をどう感じているのかをそれぞれの立場から語っていただいている。今回は看護学科の現状を伺った。



臨床看護学講座 教授 瀧川 薫

大学を構成するコンセプトの再検討

国立大学の改革政策に基づく法人化により、いきなり市場原理や競争原理の導入が謳われることになった昨今、<大学＝専門教育を教授する場>という図式のみで大学を捉えることが些か単純すぎるのではないと思われる時代になってきた。教育学者の潮木守一は、大学を幾つかの異なるコンセプトのせめぎ合う場として捉えるべきだと論じている。

そして、大学を構成する基本原理として以下のような5つのタイプを挙げた。

- 知的コミュニケーション型：新しい真理の探究の場としての大学
- 学園型：幅広い教養と円満な人格の完成の場としての大学
- 自動車学校型(教習所型)：既知知識の伝達の場としての大学
- レジャーランド型：学問を媒介としない自由な交流の場としての大学
- 党派学校型：特定イデオロギーの注入の場としての大学

大学当局にせよ、教員自身にせよ、学生にせよ、現実の大学に求めるものは様々だろう。知的コミュニケーション型の教員もいれば、教習所型の教員も存在する。学園型の学生もいれば、レジャーランド型の学生も多い。党派学校型の大学当局も存在すれば、知的コミュニケーション型の教授会もあるように思われる。大学においてはこれら5つのコンセプトが存在し、随時それらが対立・葛藤している。ひとり一人の教職員が、大学がそういう場であることを認識する必要がある。おそらく、それらに対してどのように臨むかは最終的に各個人が自己決定しなければならないことだと思われる。しかし、そのような悠長なことをいっておられる時代でもなくなってきた。どのような大学、そして看護学科を志向するかという点において核となる教育理念や、前述のような大学を構成する基本原理のどれに重きを置くのかといった将来展望について、十分に議論すべき時機が到来したのではないだろうか。現時点での看護学科では、その辺りの事案について十分に議論されている

とは言い難い。

さらに指摘するならば、米国の社会学者グールドナーの知識(knowledge)をふたつの意味・あり方で「情報」(information)と「明識」(awareness)に呼びかける考え方に注目すべきだと思う。「情報」とは技術的知識であり、対象つまり自然や社会・人間を技術的にコントロールするために生産される知識で、一方の「明識」は人々との共生関係としてある社会的世界について常に自分自身との関係で反省的に理解するための知識である。明識は対象を自分自身の関数として捉えるという点で「主体相関的」知識といえるが、この明識性を意識した知識のスタイルを、学生に提供していく必要があるのではないだろうか。

現代は、高度な技術的知識をもつ専門職集団(テクノクラート：technocrat)が強い影響力を行使する社会(テクノクラシー：technocracy)である。彼らはその道のプロ＝スペシャリストには違いないが、その反面、全体への展望を欠き、しばしば現実から遊離してしまいかねない側面をもっている。つまり、周辺環境への配慮を欠くような存在になりかねない。

看護学生時代の発達課題として、学生自身が社会生活や生き方を自覚的に反省することなくブラックボックス化している状況に強い照明をあて、成熟した良識ある対人関係専門職種として、つまり明晰な知性として、自己を再定立させることが必要だと思う。少なくともこれからの大学と教員自身は、そのような「自覚」を学生に意識させる明識性の機能や役割を忘れてはならない。それが、なによりも今後の大学の生き残りに直接に繋がる解決策のように考える。諸先生方や卒業生の諸君のお考えを拝聴したいところである。

『保健師会』やっています



後列、右から3番目が筆者

京都市（右京保健所）保健師

高城智圭（看、1期生）

試行錯誤の中で

滋賀医大医学部看護学科ができて、早くも10年になるうとしています。卒業生も300人を越えました。卒業後、多くは臨床に進む中、毎年10数人が保健分野に進みます。保健分野と一言で言っても、その就職先は地域保健分野や、産業保健分野、学校保健分野と様々です。というわけで、いざ現場に出て、仕事上の悩みや迷いがあっても相談する同窓生は少なく、試行錯誤の日々を過ごしていました。

そんな中、同窓生同士交流をし、気軽に相談できるようになることを目指して、平成10年に1期生が卒業した年から集まりをもっています。第1回目は、滋賀県下に就職した保健師と保健師希望の在大学生とで一緒に行いました。翌年からは滋賀医大を卒業し保健師として就職した者を対象とした同窓会（通称保健師会）となり、1年に1度集まっています。

卒業生と在学生の交流の場ともなっています

毎年卒業2年目さんが幹事を担当し、12月ごろ行っています。同学年だけでなく異なった学年間の交流も深められるよう、その年を担当した幹事さんが趣向を凝らしてくれています。また、保健師を希望する在校生にも声を掛け、在学生の相談ののちたりと、卒業生と在学生の交流の場ともなっています。

平成14年度は12月14日（土）京都駅前の七番館で行いました。

91人に案内を送り、30人の参加がありました。西島先生の乾杯の音頭の後、自己紹介を兼ねた近況報告をしました。プライベートでの変化があったり、職場異動した者もちらほら出てきたりと月日の経つのが早いことを実感しました。懐かしく学生時代を振り返ったり、保健師活動には不可欠の情報交換をするなどしましたが、皆さすがしゃべってなんぼ！の保健師らしく、話が尽きることなく賑やかで楽しい時間を過ごしました。

同じプランも各自治体で目標値やプロセスは異なります

厚生労働省からおろされた同じプランを実行するにも各自治体

やその住民のニーズによって、目標値やプロセスは異なります。この会を通して、いろいろな自治体の方法や考え方を聞く事で、ヒントをもらえましたし、共通する悩みを持ち、それを乗り越えようとしている仲間のお話を聞いて、励まされ、前向きな気持ちになれました。

このような会の様子を他の保健師にも知ってもらいたいと、今回から会報を作成し、参加できなかった方々に送る予定をしています。また今後、保健師会をより充実したものにしていこうという話もできました。

地域と学校・産業保健の連携が重要

保健師活動は国政や市政に大きく左右されます。最近巷でよく耳にする市町村合併も他人事ではありません。地域保健分野に働く保健師には、健康増進法のバックアップをうけた健康づくりの推進も然る事ながら、市町村合併等々の情勢の変化に伴うニーズの多様化に対応するために、障害者福祉分野、介護保険・介護予防分野、児童福祉分野、環境衛生分野、そして男女共同参画分野や政策企画分野での働きが期待されています。

今後、保健師会の中にもそれらの分野で活躍される方も出てこられるかと思います。活動分野が異なり、不安や悩みが大きくなる時、支えとなれる会になればと思っています。

最後に。保健とは健康を保つ事です。このことは本人だけでなく、家族やそれを取り巻く環境も大いに関係してきます。今回、学校保健や産業保健分野の方の参加がありませんでした。地域と学校、産業保健の連携は不可欠であり、今後ますます重要となってくると思われます。そのようなことを、学校・産業保健分野の方とも意見・情報交換が出来ればと思います。今後の保健師会をより充実したものとするためにも、学校・産業保健分野の方の参加をおまちしております。



医療従事者をめざす聴覚障害学生の 大学教育を考えるシンポジウム開催



一昨年初めて聴覚障害を持つ学生が滋賀医大に入学しました。その後2001年6月に医師法からも欠格条項（視覚障害者や精神障害者等）に対して、心身の障害を理由に資格・免許の取得を一律に制限する条項が削除されました。欠格条項撤廃後、わが国で初の聴覚障害を持つ医師の養成を滋賀医大が担う事になりました。がその聴覚障害を持つ学生の学年が進むにつれ、教員や聴覚障害を知らない学生とのコミュニケーションがうまくいかない等様々な問題が生じてきました。一方全国的にも医療従事者をめざす聴覚障害を持つ学生の増加が予想されます。そこで、6月11日（水）医療従事者をめざす聴覚障害学生の大学教育を考えるシンポジウムが、滋賀医大主催、「湖医会」の後援により滋賀医大にて開催されました。（12日付読売・京都新聞に掲載）聴覚障害を持つ学生が医療従事者をめざす時、障害者の受け入れ経験の少ない大学教育の現場で生じる問題点は何か？それをどのように解決できるのか？などをテーマにし、シンポジウムとして、聴覚障害者でありながら活躍されている現役の医師の関口麻理子氏や、聴覚障害者であるご自身や家族が受療時に様々な困難を経験された全日本ろうあ連盟理事の石野富志三郎氏を招いてのディスカッションがなされました。

滋賀医大で以前顔馴染みの荻田氏とともに学んだ学生達が、障害者のみならず、人間に対する理解や視野の広がりにつながった」と評価していました。また欧米で障害体験を通じて患者への共感が強まり患者医師関係がより良くなった」とする報告もありました。つまり聴覚障害を持つ学生の大学教育を考えることは、専門職として働く様々な場面における障害者への適切な配慮や患者との信頼関係の確立へもつながるといえます。

当日は滋賀医大の学生や教員だけでなく、学外からの聴覚障害を持つ学生の参加もあり、「聴覚障害の学生を支援するグループ・仲間が必要でしょう。医師になる目標を達成されるよう期待しています。」「医学部以外で障害者を受け入れて教育している大学もあるだろうから情報交換をしてはどうか。」「健常者から見た障害者ではなく、障害者自身の意見を聞かせてもらえて良かった。」「はじめたばかりの手話サークルを続けていこうと思いました。健常者だと気づかないようなことを実際に指摘してもらえるところのような場をこれからも時々もってほしい。」「等々の感想が寄せられました。

滋賀医大の教員や学生たちからも、聴覚障害者の理解に役立つと評価されるシンポジウムでした。なお内容の一部は聴覚障害者向けの放送やDVD京都でも放映されました。

体験談

結婚後、もし旧姓で働き続けたければ

滋賀医大 外科 浜田朋子（医8期生）

私が踏んだ失敗をぜひ湖医会の、特に女医の方々にお知らせしたいと思います。

それは結婚した後に旧姓で仕事を続けたいと希望したときの話です。医籍は戸籍名でなければいけないので入籍後3カ月以内に変更しなければいけません。医師免許書は書き換える必要はなく、もし書き換えることと不便であるということですが、書き換えてしまった場合、わたしのように、病院内では旧姓が使えても、法律上、保険医登録や麻薬取り扱い登録は医師免許書の名前、つまり戸籍名となり、麻薬や院外処方、診断書を書く時には戸籍名を使わないといけないというややこしい状態になってしまいます。一度書き換えた医師免許書は離婚しなければ旧姓には戻せません。医籍および医師免許書の変更の届け出は1枚の用紙となっており、どこにもそのようなことは載っていないし、大津市保健所の担当の方でさえも今日までご存じありませんでした！

医師免許を残す場合は用紙の、医師免許書変更」という部分だけを自分で横線で消さなければなりません。入籍したときに医師免許は医籍

とは別で書き換えなくてもよいと知っている人だけできる事のように思いました。

ちなみに私が入籍した3年前に滋賀医大では旧姓で働くことが認められていなかったのが今の状態はいたしかたがない事かもしれませんが、毎日とても不自由致しております。インターネット等をみるとやっぱり同様の話しはありました。目黒の保健所も知らなくて、衛生局から厚生省に確認をとってもらいやつと医師免許はかえずにすんだという話しもありました。電話で確認した大津の社会保険事務所でも知りませんでした。

要は、医師免許は結婚した時にかえなくてもよい旧姓で働く場合はかえない方が便利である後からはもどせない」ということなのです。

このことはどこにも載っていないことなので、私が踏んだつばを皆様が踏まないようにならなかの形でみなさんに伝えたいと思います。投稿しました。でも、逆にこれを利用すると、名前をかえずにこっそりと離婚することも可能なんです。



こんにちは、
よろしくお祈りしま〜す！

「生協ができてよかった」という声を聞いたとき、胸が熱くなりました...

滋賀医大生協
小國幸子さん
(書籍・購買部店長)

「湖医会」会員のみなさま、こんにちは。4月のはじめにオープンしてもうすぐ3ヶ月。開店までの期間が短くまさしく「突っ走って来た」という心境ですが、構成員みなさんの声で、滋賀医大生協がどんどん良くなっていく手応えを感じることができ、とても嬉しく思っています。

「湖医会」の幹事の先生や事務局の方には当初からたいへんお世話になっております。ありがとうございます。「湖医会」のみなさまには生協にご加入いただき、安い生協価格をどんどんご利用いただきたいです。またいろいろご意見を伺い、みなさまに喜ばれるご利用方法を検討していきますので、どうぞよろしくお祈りいたします。

<連絡先>

滋賀医大生協 生協内 tel 077-548-2134
fax 077-548-2134
e-mail : OGUNI@ma1.seikyoe.ne.jp

加入される方は同封の用紙をご利用ください。
1口5000円です。
できるだけ2口以上をお願いいたします。

議 事 録

第 36 回幹事会 兼 2002 年度第 2 回常任幹事会 (2003.6.5)

1, 第 2 回『湖医会賞』について

渡辺一良選考委員長より、5月17日に行われた選考委員会で下記の2名を選出したとの報告があった。幹事会で承認され、第2回『湖医会賞』の受賞者に決定した。
1・2ページに関連記事

臨床・福祉領域 青木裕彦氏(1期生)
研究領域 茶野徳宏氏(10期生)

2, 「湖医会」奨学金(仮)について

規程の具体的な内容が検討された。次回幹事会までに成文化し総会に諮る。大まかな内容は次の通りである。

- ・対象は医学科5・6回生、看護学科3・4回生の各1名。
- ・金額は一人月2万円で、その年の4月～翌年3月まで。
- ・推薦者には「湖医会」正会員の1名を含む。
- ・貸与形式にする。

3, その他

スキー部OB会メーリングリスト立ち上げの希望があった。 <承認>

「人間科学研究報告論集 第2号」刊行

医療文化学講座 哲学 教授 早島 理

豊かな人間性をそなえた医師育成を目指して、社会科学・人文科学系少数能動学習の一端として、医学科2年生を対象に「人間科学研究」の授業が平成13年度に開設されました。その本年度の成果が「報告論集 第2号」として、教育担当副学長馬場教授の「巻頭言」を得て、この3月に発刊されました。この論集は、研究テーマ選択から資料収集・研究発表して報告論文作成まで、受講生が主体的に取り組み、指導教官は必要に応じてアドバイスをするのみというシステムのなかから生み出されたものです。

滋賀県立図書館・滋賀医科大学付属図書館でも閲覧できますが、関心のある方は本学基礎医学事務室(077-548-2061)までご連絡下さい(無料)。

名簿訂正

今年3月に発行いたしました「平成14年度版 同窓会会員名簿」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

P 5	梁矢俊幸氏の	退職年月日	(誤)98.03.31	(正)98.01.15
P 10	竹内義博氏の	メールアドレス	(誤)takeuch	(正)takeuchi
P 28	下田和孝氏の	勤務先所属	(誤)獨協医大医学教室	(正)獨協医大精神神経医学教室
P 251	川浪大郎氏の	勤務先都道府県別	(誤)熊本県	(正)福岡県

ナース三姉妹

滋賀医大 看護師(外科)

岡 美登里



この看護学卒を卒業し、現在滋賀医大附属病院外科病棟に勤務している岡美登里さん(看護学科6期生)には強い興味があります。それは二人の姉、香保里さんと沙由里さん、なぜならふたりとも滋賀医大の外科病棟に勤務されているからです。三姉妹が同時に滋賀医大の附属病院に勤務されているなんて滋賀医大でなくともなかなかあることではないでしょう・・・そこで美登里さんにインタビュー形式で質問。

「ナースになられた動機は？」人と関わるのが苦手ながらも好きであり、人と深く関わる職業に就くことで苦手を克服でき、人間として成長できると思っていたからです。そしてやはり姉たちが就いている職業だから間違いはないと思いましたが、姉たちに負けないような一人前のナースに早くなれるように頑張りたいと思います。

「三姉妹でナースをされていて良かったと思われることや感想は？」同じ職業に就いているため悩みなどを分かってもらえることです。働きだしてから時々大丈夫かと声をかけてくれたりして精神的に支えてもらっています。これからは助け合って働いていければいいなと思

います。

「ご家族はどのようにおっしゃっていますか？」やはり安心だと言っています。同じ職場だから身体面においても病気になったらお互いに看病し合えるし、精神面においても支え合えるのではないかと。

「先輩ナースのお姉さま方から学んだことは？」姉たちが働きだしたときは大変でやせたりもしていましたが、今は楽しく働いているのを見てみると、看護師というのはすごく大変だけれど簡単に諦めることなく、耐えて乗り越えていく努力をしなければならぬと思います。

「新米ナースとして今一番大変なことは何ですか？」生活リズムが不規則なことです。もちろん看護師として業務を覚えていくのも大変ですが、まずは自分が健康であることが大切だと思います。夜勤なども始まって睡眠時間帯が全く変わって最近風邪を引いてしまいました。早くこの生活リズムに慣れて、十分な栄養・休息をとって健康に気をつけたいと思います。

「先輩にメッセージを！」看護師として働きだして早くも1ヶ月以上経ってしまいました。まだまだ慣れないことばかりですが、その中でつらいことや悲しいこともありましたが、逆にうれしいことや楽しいことも色々ありました。働き出すまでは本当に自分が看護師として働いていけるのか不安ばかりでしたが、実際に働きだした今は早く看護師として一人前に働けるようになりたいと強く思うようになりました。まだまだ不安もありますが、まず一歩踏み出したことで、ちょっとずつでも進んでいるのではないかと思います。また職場には思いを分かち合える同僚がいるし、先輩方は優しく時には厳しく指導して下さるし、患者様は心の暖かい方ばかりで恵まれた環境で働くことができているのではないかと思います。



助教授紹介

(2003.6.15現在)

小島秀人 (医3期生) 滋賀医科大学医学部放射線基礎医学講座 助教授



1983年3月 滋賀医科大学医学部卒業
 1983年4月 滋賀医科大学大学院入学
 1987年3月 同上修了(医学博士)
 1987年4月 市立柏原病院内科
 1989年4月 滋賀医科大学第三内科医員
 1990年4月 滋賀医科大学第三内科助手
 1999年4月 滋賀医科大学第三内科学内講師
 1999年10月 米国テキサス州ベイラー医科大学内科、分子細胞生物学教室留学
 2003年6月 現職

2003年6月1日付で滋賀医科大学医学部放射線基礎医学講座の助教授に着任いたしました。
 卒業以来糖尿病を主体に臨床と研究の両方を行ってきたのですが、留学を機会に糖尿病を治してしまう方法の開発に関わりたいたいと思い、現職に着任することになりました。
 どうかよろしく願い申し上げます。

住所・勤務先肩書き等に変更がありましたら事務局にご一報ください

第5回定期集会のご案内

「湖医会」唯一の支部!

関東支部会

日時：7月19日(土) 午後6:30 開場
 場所：品川プリンスホテル 03-3440-1111
 講演：野崎光洋先生(滋賀医大名誉教授)
 詳しくは事務局まで

募集中! 『湖医会賞』受賞候補者

同封の申請用紙をご利用ください

猪木 健 (医12期生)

アメリカに来てもう一年半が過ぎました。ピーター・シュナイダー、もつとまじめに勉強しておけば、と今頃後悔しています。

猪木敬子 (医12期生)

アメリカ、ミシガン州アンナーバーで専業主婦をしています。研究にとりつかれた主人と4才半、2才前の娘達に振り回される毎日です。

今村 註 (元、化学教授)

少子化のありを受け、地方弱小大学で学生の争奪戦の渦中に巻き込まれて悪戦苦闘しています。優秀な滋賀医大生を教育できた昔が懐かしいです。皆様のご多幸・ご発展を祈り上げます。

同期会の返信はがきから



九嶋亮治 (医6期生)

滋賀医大附属病院にも「やく」病理部ができました。病理診断や学会発表などお気軽にご相談ください。なお、連絡先や部屋は今まで通りです。

蓮見純子 (看1期生、旧姓 中村)

2000年秋に結婚しました。2001年3月に保健師として3年間勤務した町を退職し、現在は専業主婦です。卒業して5年、同期会が開催されること、とても嬉しく思います。ぜひ出席したいのですが、3月に第2子出産予定のため残念ながら今回は欠席させていただきます。気が早いですが、次回の開催を楽しみにしています。

訃報

早川忍さんの逝去を悼んで

滋賀医大 放射線科

北原左和子(医19期生)

平成15年5月9日、彼女は30歳の若さでこの世を去った。幼い頃から再生不良性貧血を患い、近年は時に入院することもあったが、「大丈夫?」と尋ねると、いつも「うん、大丈夫」と言っただけで微笑んで答えてくれた。5月6日に入院したときも、少し休んで体調が回復すれば、すぐにまた戻ってきてくれると、誰もが思っていた矢先の、あまりにも突然の訃報であった。

彼女は学生時代は陸上部に属し、皆と共に実習や試験をこなし、医師国家試験を乗り越え、卒後は放射線科での臨床研修を終え、医師として忙しく過ごしていた。与えられた仕事は一生懸命に責任感を持って遂行しようと頑張っていた。体調がすぐれなくても、決してそれを理由にすることなく、彼女は常に冷静に病と向き合い、闘ってきた。優しい中にも時折見せる頑なな気強さは、小学3年生から医師を志してきたという熱い思いのあらわれであったと、今になって思う。そして志しどおり医師となり、その道半ばにして旅立った彼女の無念さと、ずっと見守って来られたご両親の悲しみを思うと胸が痛む。
 毎日の小さな出来事をふと彼女に伝えたくなるとは、彼女がいけない寂しさを実感し、今はただ冥福を祈るばかりである。

ご協賛
ありがとうございます

株式会社近畿予防医学研究所 / 佐野器械株式会社 / 扶桑薬品工業株式会社

(順不同)